



夏と言えば、
恒例のスイカ割り！



豪雨被害から学ぶ
理事長 荻部 一夫

この夏、西日本豪雨や台風の被害を受け、尊い人命を失ってしまいました。悲しい出来事でしたが、このことを教訓にしようという防災について考えてみました。

先日、川遊びをしている河原での出来事です。普段穏やかな流れが、みるみる水位が上がり濁流に変わっていききました。上流では雷鳴が轟き豪雨が降ったとスマホが教えてくれています。ほとんどの人たちが逃げた後、それでも「まだ大丈夫」と逃げないでいる若者グループがいます。危険だという情報を知ることができても、避難行動に結びつかないこうした安易な判断が大きな事故を起こし、周囲の人たちに迷惑をかけることに繋がるのだと思いました。

今では考えられませんが、レーダーや観測網が整備されていないその昔は、台風が来ると飛行機や船で実際の台風の中に入って行って身を挺してデータを集めていました。幼少のころの記憶に、一九五九年（当時六歳でした）の伊勢湾台風があります。この台風では死者三千人を超える大きな被害が出ました。

現在では気象衛星などの観測機器が整備され、集めた情報を人工知能で処理し、台風の進路や津波被害の状況が高い確率で予測できるようになりました。携帯端末では精密なデータを居ながらにして、瞬時に手に入れることができるようになりました。現在なら伊勢湾台風と同じような台風が来ても被

害は最小限に抑えられたに違いありません。しかし、どんなに科学が進歩しようとする情報をもどるのよう理解し行動に移すのかを決めるのは、最後は人間です。今回の災害でもそれを強く感じました。

「避難勧告」「避難指示」という呼びかけは、「すぐに避難すること」を勧めています。したが、実際には避難しなかった人も少なくなかったようです。

そこには、どのような問題があったのでしょうか。受け手は、「避難しろと言われても自分は大丈夫」「ここは大丈夫」という気持ち優先したのでしよう。また、メディアの問題として、「勧告」「指示」の意味を切迫感として伝えられていなかったことも要因の一つでしょう。

このように、いくら精度の高い情報であっても、素早く知ることができたとしても、最後は受け手がその情報をいかに評価して受け入れるかにかかっているように思います。そうだとすれば私たちは、どのような力をつけていけばよいのかと考えてみました。

- ① 科学的データを読み解く
- ② 自分のいる地域の状況を知る
- ③ 分析して、早めに避難行動を始める

当たり前のことかもしれませんが、①③を意識して行うことが安全確保にはとても重要なことだと思っております。龍鳳の職員一人一人が、安全に対する意識を高め、判断できる力を身につけたいと思えました。

行動から見えてくるもの

こぶしの夏が今年もやってきました！夏休みの企画として、花火や、かき氷、小さなプールやスイカ割りを行いました。

花火は火を使うので慎重に行っていますが、ご利用者の中には、火は「あぶないよ」と言って怖くて花火を持つことが出来ないご利用者もいれば、大きな花火を持って「ほら、綺麗でしょ」と支援者に見せてくださるご利用者もいます。花火の使い方を説明しながら安全に行うことで花火の輝かしい色合いを楽しめます。

スイカ割りはスイカを台に載せて、離れた所からハチマキを巻いて目を覆い、大きい竹筒を持ってスイカを割ります。しかし、ハチマキをすることが苦手なご利用者やスイカを思うように割れないこともあります。スイカ割りの遊びを通して、ご利用者の疲れを癒し、スイカは「甘くておいしいよ」と嬉しい声もありました。

また、こぶしのプールを中庭に作り、こんなこともありました。プールに入っているご利用者は数名おり、日差しが照つける中、気持ちよさそうに水遊びをしていました。普段コミュニケーションが苦手なご利用者は居室で休んでいます。しかしその楽しそうな声が聞こえたのか、何か指を差して支援者に訴えています。その訴えは、いつも買い物に行きたい訴えと同じなため初めは買い物に行きたいのだと思ったのですが、自ら中庭に行きプールを指差しているのです。「入りたいのですか」と聞き「うん」と頷くので、「ほんとうにそうかな」と半信半疑でプールに入りました。表情は険しいです。「あれやっぱり違うかな」と思ったあと、笑顔が見えました。その時、「本当にプールに入りたかったのだね」「良かったね、気持ちいいよね」と話しかけ、私は嬉しく思えた瞬間でした。

このことは、意思決定を考えるうえでとても参考になる例でした。私達支援者は日頃のご利用者の行動から、「多分そうではないか」「このご利用者はこうだ」と決めつけてしまっていることがあります。課題に対する視点や検証する根拠を得ないまま、客観的に捉え支援をして間違うことがあります。重度の行動障害を持っているご利用者であってもそこに意思はあり、その表出には様々な経験や理解、比較や活用に至るまでの選択肢がなければ、ご利用者の意思決定は損なわれます。ですから情報を分かりやすく、意思決定の意欲を高め、コミュニケーションが表出しやすいよう支援をしなくてははいけません。

どんな人でも意思はあり、それを尊重しなくてははいけません。特にコミュニケーションが苦手なご利用者の行動やその隠されている背景は、とても複雑でそれをいかに表出し個性を引き出していくことが重要であると考えています。一つひとつの行動が何を意味しているのか。ご利用者から教えられた夏の思い出となりました。

相談支援専門員 佐藤 幸雄



コミュニケーション

個人的に今年三十歳を迎え、これまでの人生を振り返ってみる。専門学校を卒業してから、ちょうど十年。二十歳の真ん中までは飲食店のバイト、そこから放課後等デイサービスの仕事を経て現在に至るが、常に人とのコミュニケーションの中で仕事をしてきたように感じる。知的障がい者とのコミュニケーションも今では違和感ないが、知的障がい者との関わりのある仕事をするまでは偏見を持っていた。「会話が成り立たない」、「急に何するか分からない」と、危ない意識を持っていた。今はご利用者との意思疎通は可能だし、知的障がい者の行動の何故？も、なんとなく理解できる。それはご利用者とコミュニケーションを図ることによって可能になった事である。

他者との関わりを断つ事のできない人間には、コミュニケーションとは人生のテーマになるくらい重要な事だし、ご利用者のことを理解し、支援をするこの仕事では、コミュニケーション能力は必要不可欠だと感じる今日この頃である。

生活支援員 土橋 龍介

フォトニュース

～ 夕涼み会 ～



～ 夏休み余暇 ～



“ねえねえ、きいて”

<藤原 亮子>

創作グループでのことです。カエルの制作をする時、カエルの歌を歌おうとして「カエルはどんな泣き声かな」と皆に聞くと「ゲタゲタだよ」とAさん。するとBさんが真面目な顔で「違う、ワハハだよ」と一言。思いがけない答えに笑いながらも癒されるひと時でした◎

就寝前Cさんと過ごす時いつものように「踊って」と言うリクエストが。「何の歌が良いですか」と聞くと「瀬戸の花嫁」との事。瀬戸の花嫁で踊るのは難しいと思いつつ踊っていると「ワッショイワッショイ」とCさんの合いの手が…。気が付けば二人で10分踊っていました！！

<高野 竜>

Aさんと外食に行った時の話です。ドリンクバーを取りに行くと他のお客さんが「アイスコーヒーないのかなあ？」と言って、ドリンクバーのスペースを往来していました。するとAさんが指をさして「ここだよ(=ω)！」と教えてあげたのです！アイスコーヒーを探していたお客さんは笑顔になって「ありがとう！見つけるの上手ね！」と言ってくれました。褒められたAさんは少し照れながら「パッチグー！」と返事をしていました。それを横で見ている(´▽`)ウツと嬉しくなり笑顔になってしまいました。施設外に出ることで見える素敵な一面を引き出せる機会を増やしていきたいなと思える瞬間でした。



～こぶしまつり開催のお知らせ～



平成30年10月20日(土) 10:30～15:00 ※雨天決行

今年もこぶしまつりを開催いたします。

喫茶店・模擬店・その他各種催しを企画しております。是非お越しく下さい。



余暇の充実

ライフパートナーこぶしに入職し、2年目の夏が過ぎました。余暇課に配属が決まり、担当の業務を持たせていただきました。そのひとつは、外食支援です。休みの日の昼食に、ご利用者はお小遣いを持って、好きなものを食べるに出掛けます。お昼に食べたいものを食べるという、ごく当たり前だと感じてしまう事を、前もって計画し「余暇」として、その機会を提供しています。ご利用者の中には「〇〇たべたよ！」「〇〇いつてきたよ！」と笑顔で話してくれる方もいます。ご利用者にとって、施設の中での生活ではなかなか味わうことのできない充実した時間になっていることを願い、計画を立て実行しています。「休みの日はのんびりしたい」「休みの日こそアクティブに出掛けたい」などの様々な要望を、日々の生活から察知し、より良い余暇の充実を図る事に努めたいと思っています。